

今週の為替相場見通し(2022年9月12日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		140.05 ~ 144.99	142.65	140.00 ~ 144.50
ユーロ	(ドル)		0.9864 ~ 1.0114	1.0046	0.9900 ~ 1.0150
(1ユーロ=)	(円)		138.70 ~ 144.71	143.30	142.00 ~ 146.00
英ポンド	(ドル)		1.1407 ~ 1.1646	1.1584	1.1450 ~ 1.1650
(1英ポンド=)	(円)	*	160.63 ~ 166.32	165.14	163.50 ~ 166.00
豪ドル	(ドル)		0.6699 ~ 0.6877	0.6847	0.6750 ~ 0.6950
(1豪ドル=)	(円)	*	94.94 ~ 97.92	97.58	96.00 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 140.00 ~ 144.50 円

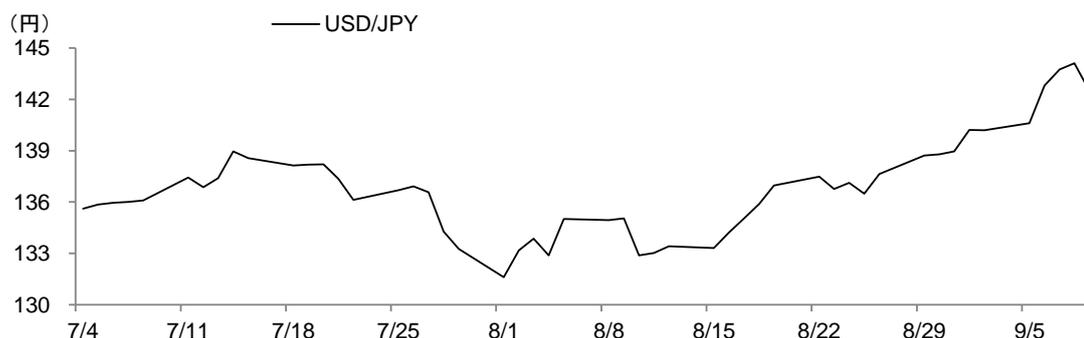
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は145円に迫る展開。5日、オセアニア時間に週安値である140.05円をつけ、その後140円台半ばでオープンしたドル/円は前週末の米8月雇用統計の結果にサポートされて堅調な推移。その後は米国休場で小幅な値動きとなった。6日、ドル/円は米長期金利上昇を受けて、ドル買いが加速。米10年債利回りが一時約3か月ぶりの高水準を記録したことや米8月ISM非製造業景気指数が予想を上回ったことも相まって24年ぶりの高値水準を更新し、143円台を記録した。7日、ドル/円は更に騰勢を強め、日米の金利差を意識した取引が継続。海外時間には一時週高値の144.99円を記録し145円に迫るも、世界景気減速懸念から米金利上昇も一服し、ドル売り優勢となって144円付近まで下落した。8日、前日の大幅続伸の流れを引き継ぎ買いが先行し144円台半ばまで上昇するも財務省・日銀・金融庁の3者会合実施の報道から急速な円安へのけん制が意識される中、じり安となった。海外時間ではパウエルFRB議長が討論会にてインフレ抑制に向け強く行動することを示唆すると米金利が上昇しドル買いが強まりドル円も144円台まで値を戻した。9日、黒田日銀総裁による円安けん制発言や週末を控えた調整売りからドル/円は141.50円台まで下落。しかし売り一巡後は値を戻し、142.60円台で越週した。

今週のドル/円相場は調整局面に警戒したい。先週のドル/円相場は米10年債利回りが上昇し、ドル高優勢の中144.99円まで上値を伸ばし年初来高値を更新するも、その後は当局による円安けん制の発言が相次ぎ141円台半ばまで上昇幅を縮小させた。今週については米国で13日(火)に米8月CPIが発表される。前回の米7月CPIについての結果は前年同月比+8.5%と6月(同+9.1%)から減速したことで、市場では一時インフレのピークアウトとの見方が広がった。今回の市場予想は前年比+8.1%となっているが、仮に市場予想対比強い結果になったとしても9月+75bp利上げが相応に織り込まれている中、ドル買い圧力は限定的となろう。むしろ市場予想対比弱い結果になった場合、11月以降の利上げ織り込みを剥落させる形でドル/円が下落する可能性に注意したい。また、指標通過後は週を通して全体的に目立ったイベントがなく、FRB高官もブラックアウト期間に入るため、ドル/円は方向感に乏しい値動きを予想する。重要指標の発表は13日(火)に米8月CPI、14日(水)に米8月PPI、15日(木)に米8月小売売上高、米9月NY連銀製造業景況指数、米8月鉱工業生産、16日(金)に米9月ミシガン大学消費者マインド(速報値)の発表予定している。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き: 安値 140.05 円 高値 144.99 円 終値 142.65 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 0.9900 ~ 1.0150 142.00 ~ 146.00 円

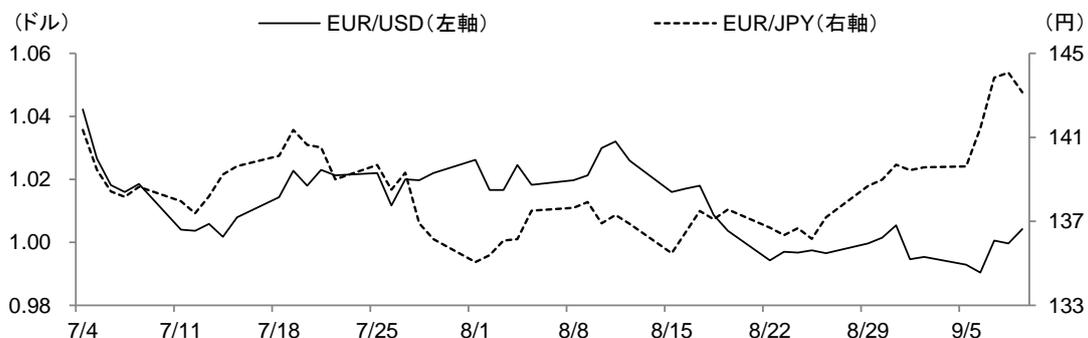
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は前週に続きパリティ(1ユーロ=1ドル)割れし、年初来安値も更新した。週初5日、0.99台でオープンしたユーロ/ドルは、前週末にノルドストリーム1の稼働再開が延期されたことにより、エネルギー供給問題が再燃。ユーロ圏8月PMIの下方修正をはじめ経済指標が軟調に終わったことも意識され、一時0.99を割り込んだ。6日、前日の流れが継続しユーロが手放される一方で、米金利上昇を受けたドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは前日の安値を更新する0.9864をつけ、約20年ぶりの水準まで落ち込んだ。7日、ユーロ/ドルは米金利上昇が一服したことやユーロ/円の上昇が下支えとなって次第に値を戻す展開。翌日にECB政策理事会を控え、ECBがインフレ抑制のために利上げ幅を拡大する予想も強まり、終盤にかけてユーロ/ドルは1.00を回復した。8日、ECB政策理事会の結果待ちで材料難の中、ユーロ/ドルは1.00ちょうどを挟んで小動き。ECB政策理事会にて+75bpの利上げが発表され、一時1.0030まで上昇したが、域内の景気減速懸念は根強く、0.99台前半まで反落した。9日のユーロ/ドルは1.00ちょうど付近でオープンすると、複数のECB理事が利上げに対して積極的な姿勢が意識され週高値の1.0114まで上昇するも買い一巡後は1.0050レベルでの狭いレンジでの推移となり1.0046で越週した。

今週のユーロは軟調な推移を予想する。9月FOMCでの利上げ幅を巡り米8月CPIの発表が一番の注目材料となる。現在9月+75bp利上げが90%以上織り込まれている中、8月同様インフレ鈍化の兆しが確認されれば、利上げ織り込みの剥落、対ドルでのユーロ下落のスピードは鈍化すると予想する。ブラックアウト期間の為、要人発言等はないものの、絶対水準としてのインフレが高止まりしている状況に不変はなく、Fedメンバーのインフレ対処に対するタカ派スタンスは変わらないことが想定される。先週のECB政策理事会にて+75bp利上げをしたものの、Fed対比では利上げのペースが遅いことに加えて、天然ガスの供給不安や価格上昇に伴うユーロ圏の景気不安が意識され続ける中、ユーロ/ドル相場は軟調な地合いとなろう。他方、ユーロ/円については先週開催された日銀、財務省、金融庁による3者会合等にて円安牽制発言が見られたものの、日銀の現行のスタンスの変更は考え難く、主要国の中銀との金融政策差に伴う広範な通貨での円売りが続きユーロ/円は上昇すると予想する。今週は13日(火)独9月ZEW調査、ユーロ圏9月景気期待指数、14日(水)ユーロ圏7月鉱工業生産、15日(木)ユーロ圏7月貿易収支等の経済指標の発表を控えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き: (対ドル) 安値 0.9864 高値 1.0114 終値 1.0046
(対円) 安値 138.70 高値 144.71 終値 143.30



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.1450 ~ 1.1650 163.50 ~ 166.00 円

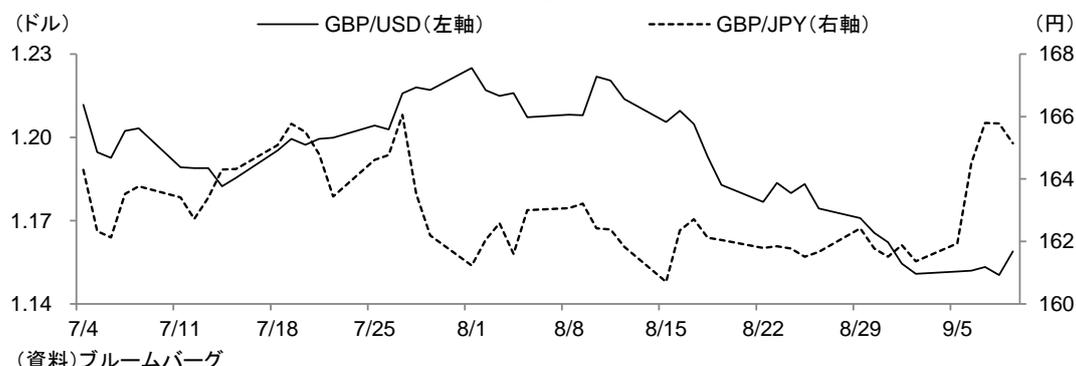
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは細かい上下動を経て小幅上昇。対円では上昇先行から高止まりと明確な上昇。対ユーロでも上昇が先行したものの最終的に小幅下落と、主要通貨に対して値動きを分けた。この1週間に限って言えば、主要通貨の強弱は(最強)ユーロ>ポンド>ドル>円(最弱)という序列になったが、ユーロ高の背景には、金利上昇=通貨高の構図が引き続きあった。8日の理事会において、欧州中銀は政策金利を+75bp引き上げた。この利上げは、市場予想の中央値ではあったものの、少なからぬ少数派が+50bp利上げを予想していたことから、その後、ユーロは素直に堅調気味の推移を支配的とさせた。週明け5日から6日のロンドン時間昼に掛け、ポンドは全面堅調と言える値動きを見せたが、ポンド上昇の要因ははっきりしなかった。5日当地時間昼過ぎには与党保守党党首選の結果が発表され、従前の予想通りトラス外相が当選。翌6日にはジョンソン前首相の辞任を受けてトラス新首相が就任した。新党首候補がスナク前財務相とトラス外相に絞られて以降、同外相の財源の不明瞭な財政拡大方針などを嫌気して、金融市場はポンドを売り浴びせてきていたことから、或いは、この結果発表を受けて、「噂(予想)で売って事実で買い戻す」動きがポンドの調整的反発を誘ったのかもしれない。しかし、ポンド堅調は長続きせず、6日の当地時間昼過ぎ以降、特段の材料も見当たらない中、対ドル、対ユーロで再び下落。7日には、対ドルで直近安値(2020年3月の1.1413)を僅かながら割り込み、1985年3月来の安値となる1.1407まで下落した。9日の週明け前には、円が全面的に反発し、ポンドも対円で(7日の高値から)2円前後水準を切り下げたが、これは日銀黒田総裁の円安けん制発言(「急激な為替変動は好ましくない」など)を受けた値動きだった。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。敢えて選ぶなら軟調を警戒する。軟調を警戒するのは、先週、ポンドが調整的な反発を見たのとは裏腹に、英長期債が一貫した低迷が続けたから。ただ、8日逝去したエリザベス女王を悼んで、英国は喪に服することになる。発足したばかりのトラス政権だが、本格的な政策論争は、英国内(与党対野党)でも、国際的にも(英対EU、英対ロシアなど)、しばらくは休戦状態となろう。トラス内閣の陣容をひとことで表すならば、「ぱっとしない」という言葉が浮かぶ。ジョンソン内閣の「二線級」閣僚を主要閣僚に登用しただけの印象で、政策の継続性と言えば聞こえは良いが、スキャンダルで自滅した前政権の負の遺産から脱却できていない。党首選で激しい論戦を交わしたスナク前財務相支持者からは、ほとんど人材を登用しておらず、党内融和を図った様子もうかがえない。下院議員による投票では、同前財務相への支持の方が明確に多かった事実を鑑みると、新政権の政局運営は、まず、与党内の意見調整に大きなエネルギーを費やさなければならない可能性も考えられる。新政権発足直後の「蜜月期間」があれば、新政権によく見られる求心力の高まりを期待できたかもしれないが、政権発足2日後に女王逝去の訃報を聞くという不運もあって、そうした盛り上がりはほとんど伝わってこない。今週は、12日(月)に英7月鉱工業・製造業生産、英7月貿易収支、13日(火)に英5~7月平均賃金他雇用関連指標、14日(水)に英8月CPI、16日(金)に英8月小売売上高などの英経済指標発表が並ぶが、15日に予定されていた英中銀金融政策委員会は、服喪のために22日(水)まで先延ばしとなり、英経済指標に注がれるはずだった感心も、些か削がれてしまった感がある。欧州中銀の大幅利上げを受け、市場は、英物価の高止まり、英中銀の+50bp利上げの織り込みを進めたはずだが、一部には+75bpを見込む動きも台頭し始めている。予想から明確に上振れた数字が並んだ場合には、+75bp利上げの織り込みが更に進むことが、ポンドの追い風になる可能性も考えられなくはない。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き: (対ドル) 安値 1.1407 高値 1.1646 終値 1.1584
(対円) 安値 160.63 高値 166.32 終値 165.14



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 原田 和志

(1) 今週の予想レンジ: 0.6750 ~ 0.6950 96.00 ~ 100.00 円

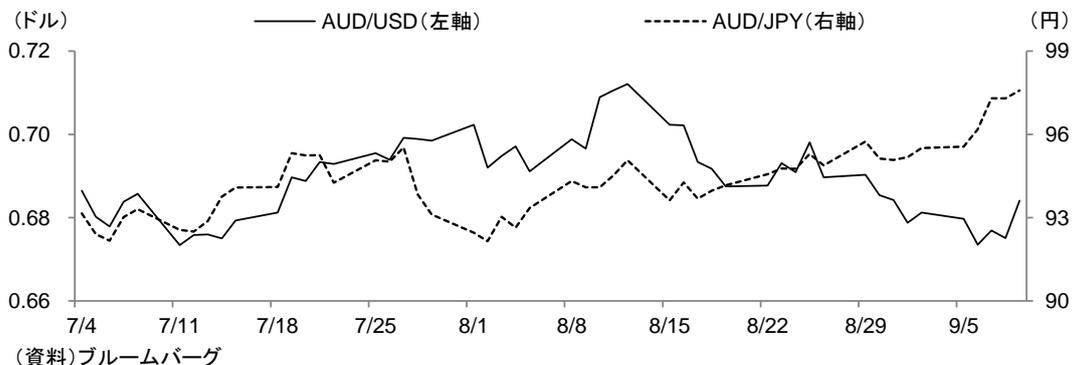
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週半ばに下落したものの、週末にかけて反発するなどレンジ推移となった。週明け5日は、0.6790近辺でオープン後、豪金利が重く推移する中レンジで推移し、欧州エネルギー不足深刻化への警戒感から方向感のない展開となった。6日は、0.68ちょうど近辺でスタート後、アジア株が上昇する動きに0.6830近辺まで上げるも、RBA政策会合通過後はドル買い一色となり、NY引けは0.6730近辺まで下落した。RBA政策会合に関しては政策金利を市場予想通り+50bp引き上げ、2.35%とした。声明文では「今後数カ月でさらなる利上げを政策委員会は見込んでいるが、既定の軌道上にはない」「将来の利上げの幅とタイミングは今後のデータのほか、インフレおよび労働市場見通しに関する政策委の判断に左右される。政策委は豪州のインフレ率をいずれ確実に目標に戻すために必要な対応にコミットしている」と繰り返した。また、インフレに関しては供給サイドの問題の解決でCPI上昇率の減速を予想しているとした。7日は、0.6730近辺でスタートし、1日を通して0.67ちょうどを数回トライするも跳ね返され、NY引けにかけては原油安を背景とする米債利回り低下や米株が反発する動きに0.6770へ上昇した。8日は、1日を通しレンジ推移となった。開催された「インフレと金融政策フレームワーク」についての講演でRBAロウ総裁は「キャッシュレートの上昇につれ、金融引き締めペースを緩める根拠が強まる」と指摘し、豪中銀による大幅利上げ終了の可能性が示唆され、豪ドルは0.67半ばから0.6715近辺での推移となった。9日は、資源価格の反発とともに豪ドルも上昇。週半ばの下落を埋め、0.6847で越週した。

今週の豪ドルは軟調推移を予想。先週6日のRBA政策決定会合では、大方の予想通り+50bpsの利上げを実施。欧米各国が高インフレを抑えるために利上げを実施しているが、豪州もその流れに乗った格好だ。一方で、8日にはシドニーの講演でキャッシュレートの上昇するにつれて、金融引き締めペースを緩める根拠が強まると発言し、大幅利上げの早期終了を示唆。高インフレ対応のため、リスク資産下落もいとわぬFRBの姿勢とはやや異なり、豪ドルは積極的に買いにいける地合いではない。引き続き、豪ドル下落のトレンドは継続すると思われる。尚、今週の主な予定は、13日(火)に豪9月消費者信頼感指数、15日(木)に豪8月雇用統計の発表を控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/5~9/9)の値動き: (対ドル) 安値 0.6699 高値 0.6877 終値 0.6847
(対円) 安値 94.94 高値 97.92 終値 97.58



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。